

ダニエル書 - ナンバー3

二重の幻視

Jeff Pippenger

2023-11-25

私たちは現在、ダニエル書においてレビ記26章の「七つの時」を扱っています。目を閉じることを選んだ者にはそれは隠されていますが、見ようとする者にはそこにあります。ダニエル書8章13節から始めます。

そのとき、私は一人の聖なる者が語るのを聞いた。すると、別の聖なる者が、語っていたあの聖なる者に言った。「日ごとのささげ物に関する幻と、荒廃をもたらす背きは、聖所と軍勢の双方が踏みにじられることになるまで、いつまで続くのですか。」
ダニエル書 8:13.

その節は「then」という語で始まっており、直前の十節でダニエルが見た預言的歴史の幻と区別をつけている。この章の一節と二節は、ダニエルがその幻を受けた年と、彼がそれをウライ川のほとりで受けたことを示している。三節から十二節にかけて、彼は預言的歴史の幻を「見る」。その後（「then」）、彼は問いと答えから成る天上の対話を「聞く」。十五節では、彼は、たった今「見た」その預言的歴史の幻が何を表していたのかを求め始める。三節から十二節でダニエルが「見た」幻と、彼が「聞いた」天上の対話を区別して認識することが不可欠である。というのも、それらは二つの異なる幻だからである。

しかし、あなたがたの目は見ているので幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているので幸いです。マタイ13:16

13節の問いは「その幻はいつまで続くのか」であり、「幻」と訳されている語は、16節で「幻」と訳されている語とは異なるヘブライ語である。

そして私は、ウライ川の両岸の間から人の声を聞いた。その声は呼びかけて言った、「ガブリエルよ、この人にその幻を悟らせよ。」ダニエル書 8:16.

二つの異なるヘブライ語を英語の“vision”に訳してしまったことで、レビ記二十六章の“seven times”は「誰の目にも明らかなく所に隠されてしまった」。単に表面をなぞるだけで満足している聖書を学ぶ人々は、これら二つの異なるヘブライ語を同じ語と見なしってしまうが、それは自らの身を危険にさらすことになる。

表面をなぞるだけでは、ほとんど益にならない。それを理解するには、思慮深い探究と、熱心で骨の折れる学びが求められる。みことばには、表面の下に隠された貴い鉱脈のような真理がある。人が金や銀を掘るようにそれらを掘り求めるなら、秘められた宝が見いだされる。真理の証拠は聖書そのものの中にあることを確信しなさい。ひとつの聖句が、ほかの聖句を解き明かす鍵となる。豊かで隠された意味は神の聖霊によって開示され、私たちが理解できるようにみことばが明らかにされる。「あなたのみことばが開かれるとき、光が与えられ、単純な者にも悟りを与えます。」キリスト教

私たちは、神の御言葉において「すべての事実にはそれぞれの意味がある」と教えられている。もし私たちが、第八章で「vision」と訳されている語がヘブライ語では異なる二語であるという事実を無視することを選ぶなら、自らをラオデキア的な盲目に陥らせる責任は私たちにある。古い格言に、「見ようとしぬ者ほど盲目な者はいない」とある。

聖書には、この世の生活にも来るべき世の生活にもふさわしい者とされるために、人が理解すべきすべての原則が含まれている。そして、これらの原則はだれにでも理解できる。聖書の教えを受け止める心のある人は、聖書のひとつの箇所を読むにしても、そこから何かしら助けとなる思いを得ないではいられない。だが、聖書の最も価値ある教えは、たまの、あるいは断片的な学びによっては得られない。その壮大な真理の体系は、せっかちに、またはおろそかに読む者に見いだせるようには示されていない。その宝の多くは表面のはるか下にあり、丹念な探究とたゆまぬ努力によってのみ得られる。大なる全体を形づくる真理は、探し求めて拾い集めなければならない。「ここに少し、あそこに少し」。イザヤ書 28:10

このようにして探し出して集めるなら、互いに完全に適合していることがわかるだろう。各福音書は他の福音書の補足であり、すべての預言は別の預言の解明であり、あらゆる真理は他のある真理の展開である。ユダヤの経綸の型は、福音によって明らかにされる。神の言葉にあるすべての原則にはそれぞれの位置があり、あらゆる事実にはそれぞれの意義がある。そして、その全体としての構造は、その構想と遂行において、その作者を証言している。このような構造を構想し形作ることができるのは、無限者の知性以外にはない。Education, 123.

ダニエル書第八章では「vision」という語が十回現れるが、その十回は二つの異なるヘブライ語から成っており、両者の意味は同じではない。もし同じ意味であったなら、ダニエルはその十箇所すべてでそのうちの一つだけを用いたはずである。ダニエルが二つの語を書いたのは、それぞれに独自の意味があり、一方はダニエルが「見た」幻を、もう一方は彼が「聞いた」幻を表しているからである。十三節では、「vision」と訳されている語は *châzôn* で、「光景」あるいは「幻」、「夢」または「神託」を意味する。私はその定義とダニエルの用法に基づいて、それを「預言的歴史の幻」と呼ぶ。

ダニエル書8章の第1節では、ダニエルは「私に幻が現れた」と言い、第2節では「私は幻のうちに見た」と二度述べている。次いで第13節では、「その幻はいつまで続くのか」という問いが提起される。これらの用法はすべてヘブライ語の「*châzôn*」である。さらに第15節では、ダニエルが同じ語を用いたおそらく最も重要な箇所に至る。彼は「私が…幻を見て、その意味を求めたとき」と言っている。ダニエルがその *châzôn* の幻を見た後、彼はそれが何を意味するのかを理解したいと思ったのである。これは、この章におけるレビ記26章の「七つの時」が隠されていることに大きく関わる事実である。

彼は17節と26節でも *châzôn* という語を用いている。

ダニエル書8章では「vision」という語が10回現れ、そのうち7回は *châzôn* を指す。

ダニエルは「vision」と訳される別のヘブライ語も4回用いている。

その別のヘブライ語は *mar'eh* で、「外見」を意味する。

Châzôn はダニエル書8章に7回、mar'eh は4回現れ、この二つが合わせて、英語の語“vision”がダニエル書8章に現れる10回に相当する。とはいえ、7に4を足すと11になる。というのも、ダニエルが mar'eh を用いたうちの1回は、その定義どおりに訳されているからである。すなわち15節で、ダニエルが預言的歴史に関する Châzôn の幻の意味を求めたとき、彼の前に「人の姿のような者」が立っていた。ここでの“appearance”が mar'eh である。ゆえに、ダニエルは8章で mar'eh を4回用いており、そのうち1回は主要な定義である“appearance”に一致する訳が施され、残りの3回は“vision”として訳されている。

私は、欽定訳聖書を翻訳した人々を批判しようとしているわけではありません。ただし、注目すべきは、13節に、欽定訳聖書における挿入語のうち、靈感が明確に「本文に属さない」と断言している唯一のもの（sacrifice）が見られることです。さらに靈感は、その語が「人間の知恵によって付け加えられた」とも述べています。同じ章の中で、互いに異なる二つのヘブライ語が、同じ英語の語に訳されています。これら二つの語の違いを認識することが不可欠である理由は、極めて重要です。

そして、私、すなわちこのダニエルが幻を見て、その意味を求めていたとき、見よ、人の姿のような者が私の前に立っていた。私はウライの岸の間から、人の声が呼ばわって言うのを聞いた。「ガブリエルよ、この人にその幻を悟らせよ」。ダニエル 8:15、16。

ダニエルが、たった今「見た」“châzôn の幻”の「意味を求め」ていたとき、キリストは、たった今「聞いた」“mar'eh の幻”をダニエルに理解させるようにと、ガブリエルに告げる。ダニエルは預言的歴史の幻を理解したいと願っていたが、13節でパルモニ（語った、ある聖者）として同定されているキリストは、“châzôn の幻”ではなく“mar'eh の幻”を理解させるようにとガブリエルに命じた。15節と16節においては、ガブリエルの使命は、ダニエルが理解したいと望んだ預言的歴史の幻ではなく、「幻」と訳される語で本来「外観」を意味する“mar'eh の幻”をダニエルに理解させることであると明記されている。ガブリエルの任務に気づかなければ、レビ記二十六章の「七回」は目の前にありながら見過ごされてしまう。

二十六節では、「幻」と訳されるヘブライ語の二語が同じ節にあり、その節は「七つの時」についてのダニエルの証言の真理を解き明かす主要な鍵の一つとなる。

そして、夕と朝について告げられたその幻は真実である。ゆえに、その幻を封じよ。これは多くの日に及ぶからである。ダニエル書 8:26。

二十六節では、「夕と朝の幻」は mar'eh の幻であり、「外観」を意味するが、「封じられるべき」幻は、預言の歴史に関わる châzôn の幻である。「夕と朝」という表現こそが、この二つの幻の相違を切り分け、明確にしている。これは、聖書の成立における人間的要素の一例を通して示されている。その人間的要素には、聖書の言葉を書き記した預言者たちだけでなく、聖書を翻訳した人々も含まれていた。聖書は、キリストと同様に、神性と人性の結合を表している。その人性は、罪を犯した後のアダムから、聖書を記し翻訳した人々に至るまで、歴史を通じて受け継がれてきた。キリストも聖書も共に神のことばであり、神のことばは純粹である。

なぜなら、その結合における神性が、肉に存在するいかなる限界にも常に優越し、これを凌駕してきたからである。

パウロ、イエス・キリストのしもべ、使徒として召され、神の福音のために選び分けられた者、(この福音は、聖書において預言者たちを通して神があらかじめ約束されたもので、) 御子、私たちの主イエス・キリストに関するものであり、その方は肉によればダビデの子孫から出た。ローマ人への手紙 1:1-3.

“evening and morning” という表現は神の御言葉の中に繰り返し見られ、創世記の創造物語において「and the evening and the morning were...」と繰り返し述べられている箇所でも、そして26節でも、常に“evening and morning” と訳されています。実のところ、事実にはそれぞれ重要性があり(そしてこの事実を理解することは不可欠ですが)、聖書の中で“evening and morning” という表現が(26節にあるように)“evening and morning” とは訳されていない唯一の箇所は、ダニエル書8章14節です。そこでは、そして神の御言葉の中でそこだけで、“evening and morning” という語句が、単に“days” と訳されています。

そして彼は私に言った。「二千三百日が満ちるまで。その後、聖所は清められる。」ダニエル書 8:14

ダニエル書の同じ章で、その十二節後では、ヘブライ語の語句「夕と朝」はいつもどおりに訳されている。ところが、アドベンチズムの中心的な柱であり土台となっている節では、その語句は単に「日」と訳されている。いかなる影響があつて、欽定訳聖書の翻訳者たちはこのようにあからさまな矛盾を生み出したのだろうか。彼らは二十六節では、その語句を聖書の他の箇所におけるすべての用例と一致するように訳していた。ところが二十六節の十二節前、十四節では、十三節の問いへの答えに対して、彼らの人間的な思惑によって特別な区別を与えてしまった。そして十三節の問いには、本来聖書に付け加えるべきではなかった一語(犠牲)が含まれていた。神は十四節が、非常に深く独特なしかたで際立つことを望まれた。そうすることで、ガブリエルにダニエルに理解させるよう命じられていた事柄が何であるかも、神は明らかにされた。

第16節で、イエスはガブリエルに、ダニエルが預言史の *châzôn* の幻を理解しようとしていたにもかかわらず、*mar'eh* の幻を理解させるよう命じた。第26節は、「語られた夕と朝の幻」は「真実」であったと言う。*châzôn* の幻は預言的な「見たもの」だったが、*mar'eh* の幻は「告げられた」ものであった。すなわち、第14節でパルモニが「二千三百の夕と朝まで。その後、聖所は清められる」と言ったときに語られたのである。第26節は「夕と朝」という表現を用いて、それが「語られた」幻であることを示し、ダニエル書8章における二つの幻の区別を明らかにしている。ダニエルが「見て」理解したいと望んでいた預言史の幻は、「語られた」すなわちダニエルが「聞いた」幻とは異なっていた。さらに重要なのは、ダニエルが「聞いた」幻こそ、ガブリエルがダニエルに理解させるべき幻であったということである。

聖書の作成に関わった人々は、ダニエル書8章で「幻」という語を十回記し、そうすることで「見た」幻と「聞いた」幻の区別を隠してしまった。そのため、キリストの意図は、ダニエルが「見た」幻よりも「聞いた」幻を理解することにあつた、という強調が曖昧

になってしまった。では、ガブリエルが与えられた任務を果たすために何をするのかを、今や考えることができる。

そこで彼は、私の立っていた所に近づいてきた。彼が来たとき、私は恐れて顔を地に伏せた。しかし彼は私に言った、「人の子よ、悟れ。この幻は終わりの時に関するものだ。」彼が私と語っている間、私は顔を地に向けて深い眠りに落ちていた。だが彼は私に触れて、私を起こし、立たせた。そして彼は言った、「見よ、憤りの終わりに何が起こるかをあなたに知らせよう。定められた時に終わりが来るからだ。」ダニエル書 8:17-19

ガブリエルは、真実である二千三百の夕と朝の幻をダニエルに理解させる務めに取りかかり、まず、預言的歴史の幻、すなわち chāzôn の幻が「終わりの時」に関わるものであることを彼に告げた。ついで、ダニエルが預言的な眠りの中にいたとき、ガブリエルは彼に触れて彼を起こし、直立させた。彼は「私はあなたに分からせる」と彼に告げた。

それは、パルモニ（キリスト）が「ガブリエルよ、この人に夕と朝のmar'ehの幻を悟らせよ」と言って、ガブリエルにそうするよう命じたことだった。ガブリエルは、ダニエルに「憤りの終局に何があるのか」を分からせると言っている。そこだ！

そこにレビ記二十六章の「七たび」がある！ それは、ガブリエルが預言者たちを導いて、繰り返し証言させ、彼らの著作の中で用いさせた、まさにその預言的手法によって隠されている！ その手法とは「行に行を重ね、ここに少し、そこに少し」である。

ウライア・スミス著『ダニエル書と黙示録に関する考察』（すべてのアドベンチスト、さらにはその隣人でさえもがよく知っておくべき書）において、スミスはダニエル書第8章の17～19節について次のように述べている：

彼は、定められた時に終わりが来ること、また憤りの終局に何が起こるかを彼に知らせるであろうことを総論的に述べてから、幻の解釈に入る。この憤りは一定の期間を包含するものと理解されなければならない。いつの期間か。神は、イスラエルの民に対し、彼らの悪のゆえにご自分の憤りを彼らに注ぐと告げられ、そして「イスラエルの汚れた悪しき君」について次のように命じられた。「宝冠を取り去れ、冠を取り外せ。…私はそれを覆し、覆し、覆す。それは、正当にそれに属する者が来るまで、もはや存在しない。私はそれを彼に与える。」エゼキエル 21:25-27、31。

ここに、契約の民に対する神の憤りの時期がある。聖所と軍勢が踏みにじられる期間である。イスラエルがバビロンの王国の支配下に置かれたとき、宝冠は取り除かれ、王冠は取り上げられた。それはメディア人とペルシア人によって再び、ギリシャ人によって再び、ローマ人によって再び覆された。これは、預言者がその言葉を三度繰り返していることに対応している。その後、ユダヤ人はキリストを退けたため、ほどなく地の全面に散らされた。そして霊的イスラエルが血統上の子孫に代わってその地位を占めた。しかし彼らは地上の権力のもとに従属しており、それはダビデの王座が再び据えられる時、すなわちその正当な相続者である平和の君、メシアが来られ、その王座が彼に与えられる時まで続く。そのとき、憤りは終わる。この期間の最後に何が起こるのかを、今、天使がダニエルに明らかにしようとしている。ウライア・スミス『ダニエル書と黙示録』201、202ページ。

スミスが特定している「憤り」は、紀元前677年、マナセがアッシリア人によってバビロンへ連行されたときに始まった。ところが、スミスは紀元前586年のゼデキヤの打倒を取り上げ、それを十九節の「憤り」の期間の起点だと定めている。スミスは、その節が「憤りの最後の終わり」と述べていることが何を意味するのかについて、まったく触れていない。彼はそれを単なる「憤り」として扱っているが、もし「憤り」に「最後の終わり」があるのなら、文法的にも論理的にも、少なくとも「最初の終わり」も存在しなければならない。スミスは、捕囚の七十年が紀元前606年のネブカドネザルによるエホヤキムへの最初の攻撃から始まったことは知っていたが、「憤り」の期間の起点を、ユダの最後の王ゼデキヤに対して行われたネブカドネザルの三度目の攻撃に定めた。

「われわれは彼〔ダニエル〕の幼少時代について、他のいかなる預言者に関して記録されているよりもさらに詳細な記述を有しているが、その出生と家系については、彼が王統、すなわちおそらく当時すでにきわめて数多くなっていたダビデの家の出であったということを除き、まったく不明のままに置かれている。彼が最初に現れるのは、バビロンの王ネブカドネザルの第一年、すなわち七十年捕囚の始まりである紀元前606年における、ユダの高貴な捕囚の一人としてである。そのときなおエレミヤとハバククは預言を語っていた。エゼキエルはそののち間もなく、さらに少し遅れてオバデヤが預言活動を開始した。しかしこの二人はいずれも、ダニエルの長く輝かしい生涯の終わりに至るよりも何年も前に、その働きを終えた。彼の後に続いた預言者はただ三人、すなわち紀元前520-518年に同時代に短期間預言職を務めたハガイとゼカリヤ、そして旧約聖書の最後の預言者マラキであり、彼は紀元前397年ごろ、しばらくの間活動した。」ウリア・スミス『Daniel and the Revelation』19頁。

スミスは、第19節の「憤り」を期間であると正しく見定めた。彼はその期間を、ダニエル書8章13節に一致して、聖所と軍勢が踏みにじられる時期だと正しく同定し、終点を1844年10月22日と正しく特定した。

スミスは部分的には正しかったが、預言の適用における彼特有のやり方に従ったため、真理を見誤った。彼は、預言のことばに自らの歴史理解を導かせるのではなく、歴史に預言のことばの解釈を導かせてしまった。私たちが聖書に預言的歴史を規定させるなら、歴史に臨むための正しい情報を持つことができる。

聖書は、人は誰に打ち負かされるかによって、その相手のしもべとなると教えている。

彼らは人々に自由を約束しながら、当の彼らは墮落のしもべである。なぜなら、人は何かに打ち負かされれば、その同じものの奴隷となるからである。第二ペテロ2章19節

紀元前677年、マナセはバビロンに捕囚として連行された。そのときユダは征服され、隷属の身となった。これは1843年と1850年の両図表に示されている起点であり、シスター・ホワイトが正しいと認めている。スミスは、ダニエル書8章13節の「踏みにじり」を、ユダの最後の王ゼデキヤから始めている。ゼデキヤは段階的な裁きの終わりであって、始まりではなかった。シスター・ホワイトは、マナセのバビロンでの捕囚が、これから起こることの「頭金」であったと述べている。「頭金」とは最初の支払いであり、その後支払いが続く購入の開始を示す。

「預言者たちは忠実に警告と勧めを続け、恐れることなくマナセとその民に語りかけた。しかしそのメッセージはあざけられ、退転したユダは耳を貸そうとしなかった。彼らがなお悔い改めないままにいるなら民に降りかかることの前兆として、主は彼らの王がアッシリアの兵士の一隊に捕らえられることをお許しになった。彼らは『彼を鎖で縛り、彼らの一時的な首都であるバビロンへ連れて行った』。この苦難は王を我に返らせた。『彼は自分の神である主に懇願し、先祖の神の前に大いにへりくだり、主に祈った。すると主は彼の願いを受け入れ、彼の嘆願を聞き、彼を再びエルサレムの王国に戻された。そのときマナセは、主こそ神であることを知った』。2Chronicles 33:11-13. だが、この驚くべき悔い改めも、長年の偶像礼拝の慣行がもたらした腐敗の影響から王国を救うにはあまりに遅すぎた。多くの者がつまずいて倒れ、二度と立ち上がることはなかった。」『預言者と王たち』 382.

マナセは、「七つの時」の「呪い」を開始させる「頭金」となった。これは最後の「怒り」であった。というのも、北王国が紀元前723年に捕囚とされたときには、すでに「最初の怒り」が始まっていたからである。その後、エホヤキムが打ち倒され、ダニエルが捕囚として連行されたとき、エレミヤが示した七十年の捕囚が紀元前606年に始まった。エホヤキムから二代後、エルサレムは破壊され、ユダの最後の王ゼデキヤは、自分の目の前で息子たちが殺されるのを見せられ、その後、両目をえぐり取られてバビロンへ捕囚として連行された。

スミスは、さばきの進展全体をゼデキヤに帰属させ、自説の証拠聖句としてゼデキヤに対するさばきを用いた。「邪悪で不敬な君主」であったゼデキヤに対するそのさばきは、キリストが来て御国を打ち立てる時まで、ユダの王冠が取り去られることを示していた。スミスはこう述べた。「彼らは地上の権力に服しており、ダビデの王座が再び据えられるまで—その正当な継承者、メシア、平和の君が来られるまで—そうであり、そのときそれは彼に与えられるだろう。」1844年10月22日、ダニエル書第七章十三節と十四節の成就として、人の子として表されているキリストが、御国を受けるために御父の前に来られた。

私は夜の幻の中に見た。見よ、人の子のような者が天の雲に乗って来て、日の老いたる者のもとに来た。彼はその方の前に導かれた。彼に主権と栄光と国が与えられ、すべての民、諸国、諸言語の者が彼に仕えるようになった。彼の主権は永遠の主権であって、過ぎ去ることがなく、その国は滅ぼされることがない。ダニエル書 7章13、14節。

ホワイト姉妹は、ダニエル書7章13節と14節が1844年10月22日に成就したことを確認している。

ダニエル書8章14節に示されている、聖所の清めのために私たちの大祭司としてキリストが至聖所に来られること、ダニエル書7章13節に示されている人の子が「日の老いたる者」のもとに来られること、そしてマラキが予告した主がご自分の宮に来られることは、いずれも同じ出来事の描写である。また、これはマタイ25章の十人の乙女のたとえにおいてキリストが述べられた、花婿が婚礼に来ることによっても表されている。『大争闘』 426ページ。

スミスは、「憤りの最終の結末」の肝心な要素には触れなかった。彼は、ユダがマナセの時代に征服されたこと、そしてゼデキヤの二代前に始まった捕囚が、ゼデキヤがその運命に遭う前にユダがすでにバビロンに服属していたことを示す聖書の原則を避けた。こう

した露骨な省略にもかかわらず、彼はなお次のように述べた。「ここに、神の契約の民に対する憤りの期間がある。聖所と軍勢が踏みにじられる期間である。」したがって、彼は「神の憤りの期間」をダニエル書8章13節の「いつまでか」という問いと直接結び付けている。その答えは14節にあり、1844年10月22日までであった。

バビロンの奴隷状態へと散らされる歴史は、紀元前677年に始まり、1844年まで続いた段階的なものであった。その期間は二千五百年に当たり、もちろんレビ記26章の「七つの時」である。1844年10月22日にその期間が終わったことは、二千三百の夕と朝に関する「mar'ehの幻」について、ダニエルに第二の証しを与えた。

ガブリエルは、ダニエルにその幻を悟らせるよう命じられた。そしてガブリエルが行ったのは、1844年10月22日という終結日を裏づける第二の証言を与えることだった。彼は、二つの時の預言の成就の日付を確定するための第二の証言を与えただけでなく、スミスが正しく指摘したとおり、1844年に対する第二の証言に関連する期間は、聖所と軍勢が踏みにじられる期間として十三節において特定されていた。十三節の問いは、「日ごとのいけにえと、荒廃をもたらす背きに関し、聖所と軍勢が踏みにじられることは、いつまで続くのか」である。その期間こそが、レビ記二十六章の「七つの時」であった。

スミスが見なかった、あるいは特定するのを避けたのは、19節の「憤り」が、その憤りの「最終的な終局」であったという点である。「最後」があるなら「最初」もあるはずで、ダニエルは第11章で「最初の憤り」がいつ終わったかを示している。彼は暗黒時代に君臨した教皇権を指し示しており、教皇権はその憤りが成就し、すなわち終わるまで繁栄するだろうと述べている。

その王は自分の思うがままに行い、自らを高くし、すべての神々にまさって自分を大いなるものとし、神々の神に逆らって驚くべきことばを語り、憤りが成就する時まで栄える。定められたことは必ず行われるからである。ダニエル書 11:36

第36節は、使徒パウロがテサロニケ人への第二の手紙で言い換えていると広く考えられている。

どのような手段によっても、だれにもあなたがたを惑わされてはなりません。というのは、まず背教が起こり、不法の人、滅びの子が現れなければ、その日は来ないからです。彼は、神と呼ばれるもの、また礼拝されるもののすべてに逆らい、自分をそれらすべての上に高くし、ついには神であるかのように神の神殿に座り、自分が神であることを示します。テサロニケ人への第二の手紙 2:3、4。

パウロの「罪の人」であり「滅びの子」でもあって、「神と呼ばれるもの、また礼拝されるもののすべてに逆らい、自らを高める」者は、「自分の思うがままに行い、自らを高くし、あらゆる神々よりも自分を大いなるものとする」「王」でもある。これら両方の箇所はローマ教皇を指している。ダニエルは、教皇が「憤りが成就する」まで栄える（すなわち押し進める）と記している。三十六節のその憤りは「定められていた」。「定められていた」という語は「傷つける」を意味する。

教皇権は1798年に「致命的な傷」を受け、その時点で「第一の憤り」は成就、すなわち終結した。「accomplish」という語は、終わる、あるいはやむ、という意味である。第8章

19節にある「憤り」の終わりは、聖所と軍勢が踏みにじられる期間の終わりを示していた。それは1844年に終わったが、「第一の」憤りは1798年に終わった。

「最後の憤り」は1844年に終わり、紀元前677年にアッシリア人によってマナセ王がバビロンへ連行されてから2520年後であった。「最初の憤り」は1798年に終わり、紀元前723年にイスラエルの北王国がアッシリア人によって奴隷として連行されてから2520年後であった。

ダニエル書に隠された「七つの時」については、まだ語るべきことがあり、次回の記事で取り上げます。

「ラオデキヤにある教会の御使いに書き送れ。アーメン、忠実で真実な証人、神の創造の初めである方がこう言われる。『わたしはあなたの行いを知っている。あなたは冷たくも熱くもない。むしろ冷たいか、熱いかであってほしい。だから、あなたが生ぬるく、冷たくも熱くもないので、わたしはあなたをわたしの口から吐き出そう。あなたは「私は金持ちだ。豊かになり、何一つ必要なものはない」と言うが、自分が実は、みじめで、哀れで、貧しく、盲目で、裸であることを知らない。』」

主はここで、民を警告するために召された奉仕者たちが神の民に携えていくべきメッセージが、平安と安全を説くものではないことを私たちに示しておられる。それは単なる理論ではなく、あらゆる点で実践的である。ラオデキヤ人へのメッセージにおいて、神の民は肉的な安逸の状態にある者として描かれている。彼らは安んじて、自分たちは高い霊的達成の境地にあると信じている。「あなたは『私は富んでいる。豊かになった。何も必要なものはない』と言っているが、自分が実は惨めで、哀れで、貧しく、盲目で、裸であることを知らない。」

「皆が誤っているのに自分たちは正しいのだという確信ほど、人の心を襲うより大きな欺きがほかにあろうか。真の証人のメッセージは、神の民が悲しい欺きの中にあることを見いだす。だが彼らは、その欺きの中にあっても誠実である。彼らは、自分たちの状態が神の御目には嘆かわしいものであることを知らない。語りかけられている人々が、自分たちは高められた霊的状态にあると自惚れている一方で、真の証人のメッセージは、霊的盲目、貧しさ、みじめさという彼らの真の状態を、驚くべき断罪によって明らかにし、その安穩を打ち砕く。このように鋭く厳しい証言が誤りであるはずがない。語っておられるのは真の証人であり、その証言は必ず正しいからである。」『証言』第3巻、252頁。